遅れた手紙，壊れた時計

――J. D. サリンジャー「エズメに――愛と悲惨をこめて」における祈りの時間性

井　出　達　郎

は　じ　め　に

戦争の後遺症，いわゆる PTSD（“post-traumatic stress disorder”，心的外傷後ストレス障害）に苦しむ兵士を描いた J. D. サリンジャーの短編「エズメに――愛と悲惨をこめて」（1950 年）は，その苦しみの中で，過去に知り合った少女エズメが出してくれていた手紙に遅れて気がつき，その中に入っていた壊れた時計を手にした直後，心地よい眠気に包まれていく場面で閉じられる。あたかも，遅れた手紙と壊れた時計が，決して取り返しのつかないように思えるその時間的なずれを乗り越えて，兵士の無事を願うエズメの祈りを確かに届け，彼にひとつの救いをもたらしたとでもいうように。じじつエズメの手紙は，兵士がノルマンディ上陸作戦に参加していないことを願ったものであったにもかかわらず，兵士が手紙に気づいたのは，彼がすでにそれに参加してしまっていた後であった。だが，願ったはずの内容がすでに変更できない過去となってしまっているにもかかわらず，エズミの祈り自体は兵士に確かに届く。そこに描かれているのは，過ぎ去ってしまったはずの時間を越えて届く，祈りの特異な時間性というべきものである。本稿は，このサリンジャーの作品を，特に PTSD という

問題と相互に照らし合わせることで，そのような祈りの時間性を描いた物語として読もうとする試みである。[1]

本稿の試みは，この作品をPTSDという視点から詳細に論じた野間正二の作品論を引き継ぐものである。『戦争PTSDとサリンジャー――反戦三部作の謎をとく』の中で野間は，この作品を彼のいうサリンジャーの「反戦三部作」のひとつとしてとりあげ，主人公がPTSDの症状を鮮烈に示していることで，戦争の恐ろしさを伝えていると論じている。[2] そもそもPTSDとは，野間が説明しているように，戦争のストレスから生じるこころの失調であり，戦争が終わってもなお，普通の生活ができなくなる病気である。この定義からもわかるように，それはこころの失調全般を指すものであり，具体的には，過去の出来事を思い出したくもないのに思い出してしまう，他人との関わり合いをさけるようになる，眠れなくなるなど，さまざまな症状として現れる。野間は，1994年にPTSDの診断基準として承認された『精神障害診断統計マニュアル』を参照しながら，サリンジャーの作品の中で描かれている兵士の心身のさまざまな不調を列挙し，そのすべてがPTSDを示す症状となっていると指摘する。[3] そのPTSDに

1　祈りの時間性という主題と表現への着目は，大澤真幸『＜自由＞の条件』の中の「祈りの時間性」という章に多くを負っている。

2　野間が予め述べているように，PTSDが正式な病気として定着したのは，ベトナム戦争の帰還兵たちの多くがその症状をみせることで関心が高まっていった1980年ごろのことであり，サリンジャーの作品が発表されたのはそれより30年ほど前になる。だがそれは，作品の発表当時にその病気が存在しなかったということを意味しない。野間が言うように，「戦争のストレスから生じたこころの失調の問題は，あたりまえだがベトナム戦争に限った問題ではなかった」(3) のであり，正式な病気として認知されないまま（というよりむしろ，認知されないがゆえによりいっそう）PTSDとみなせる症状に苦しんでいた兵士はいつの時代でもいたのである。それゆえ，サリンジャーが描く兵士にPTSDの問題をみてとることは，時代錯誤ではまったくない。

3　野間が列挙する主人公の症状は以下のものである。「X軍曹は約一年のあいだ激戦を戦い抜いてきた」，「猫を撃ち殺した話をしようとするクレー伍長にたいして，X軍曹は聞きたくないと話をさえぎる」，「暗くした部屋にひとりでいる」，

苦しむ姿から戦争の悲惨さを浮き彫りにし，それを通して反戦の思想を伝えること，野間は作品の意図をそう解釈する。

主人公がPTSDであることをさまざまな症例を列挙しながら指摘する野間の方法に対して，本稿は，それを時間という問題からみることによって，PTSDとは何よりも時間に関する病であることを再確認し，そこから，その時間の病としてのPTSDに対する一つの救済として，祈りの時間性が描かれていることを明らかにする。そもそもPTSDとは，ジークムント・フロイトが定着させた「トラウマ」という語から作られたものであり，その「トラウマ」についてフロイトが「強迫反復」という言葉で説明しているように，過去に体験したことが自らの意図とは関係なく強制的に現在に回帰し，その過去が現在において反復されてしまう状態をいう。言い換えれば，戦争の経験が決して過去のものとして過ぎ去らないという，いわば時間の失調こそが，何よりも兵士を苦しめているのである。サリンジャーのこの作品は，確かにその時間をめぐる「悲惨（squalor）」を描き出しているだろう。だがそれは，ただその悲惨さを伝えるだけで終わっているのでは決してない。遅れた手紙と壊れた時計によって届けられるエズメの祈りは，過去が過ぎ去ることなく現在へと回帰してくるという時間が，ただPTSDだけに特有のものではなく，祈りもまたそうであることを示している。それは，特異な時間の出来事をめぐり，悲惨とともに描かれる，人を想って祈る「愛（love）」ということができるだろう。本稿が最終的に目指すのは，“with Love and Squalor”という副題を掲げたこの作品において，“squalor”とともにある“love”の物語を，祈りの時間性とともに読みとる

「開封していない手紙がたくさん溜まっている」，「不眠に苦しんできた」，「ワンセンテンスの意味すら解せない」，「浮遊感覚が数週間続いている」（24-25）。

ことである。[4]

1. PTSD の時間性

作品は，それ自体が時間という問題に深く関わっていることを示すかのように，三つの異なった時間軸から構成されている。まず，アメリカで作家をしていると思われる主人公が，イギリスにいるエズメという少女から結婚式の招待状を受けとる，物語における現在の時間軸，次に，1944 年に主人公が兵役でイギリスに赴き，ノルマンディ上陸作戦の直前，はじめてエズメと出会ったときのエピソードが語られる，物語の中の一番古い過去の時間軸，そして最後に，その後にノルマンディ上陸作戦に参加した主人公が，戦争が終わってからも様々な失調に苦しむ姿が，「曹長 X」という仮の名前のもとに描かれる，一つ目と二つ目の中間にあたる時間軸である。この三つ目の時間で描き出される主人公「曹長 X」は，野間が論じていたように，文章がうまく読めない，指が震える，歯茎からすぐに血が出るなど，PTSD を思わせるさまざまな症状を示している。だがその根底にあるのは，二つ目から三つ目の時間の経過の中ですでに戦争が終わっているにもかかわらず，その終わったという時間の感覚を持つことができないという，時間をめぐる苦しみである。過去が過去として文字通り「過ぎ去る」のではなく，いやおうなく現在へと回帰し，強迫的に反復されてしまうこと，主人公が示すのは，そのような PTSD の時間性にほかならない。

戦争が終わっているのにもかかわらず，ひとりだけそのような感覚を持てないという時間のずれは，主人公がニューヨークにいる兄から来た手紙

4 John Antico が指摘するように，この作品に「愛」を見いだそうとする読み方は，しばしば過度に感情的な議論に陥ってしまいがちになる。本稿の意図は，その感情的に論じられがちな「愛」を，時間というひとつの具体的な視点から，焦点を絞ったかたちで見直そうとするものである。

を読む場面に端的にみてとることができる。兄は弟に次のように書いている。「いまいましい戦争ももう終わって，そっちで時間もたくさんできただろうから，うちの子どもに銃剣やかぎ十字をふたつみっつ送ってやってくれないか……（“Now that the g.d. war is over and you probably have a lot of time over there, how about sending the kids a couple of bayonets or swastikas . . .” ）」（106）。「戦争は終わった（war is over）」という表現は，兄の時間の感覚をこの上なくわかりやすく表しているだろう。戦争が終わっていることを “is” という be 動詞の現在形で表現するその文は，兄の「現在」にとって，戦争が文字通り「過ぎ去って（“over”）」しまったもの，今の自分に決して迫ってくることのない「向こう側（“over”）」にあるものでしかないことを，現在形という時制によって明確に示している。銃剣やかぎ十字という戦争の道具を送ってほしいという頼みも，兄にとっての現在という時間のあり方を強調しているだろう。兄が考えている銃剣やかぎ十字は，主人公が目の当たりに体験したであろう，戦争の真っ只中にあった銃剣やかぎ十字ではない。子どものためにそれらを送ってほしいと頼めるのは，彼が戦争とはまったく関係のない現在を生きているためである。

この兄に対する主人公の時間的なずれは，手紙を読んだ直後の描写に，生々しいイメージとともに暗示されている。「いまいましい戦争ももう終わって」で始まる文に出会ったとき，主人公は手紙を読むのをやめ，それを破り捨てる。この反応だけでも，「戦争は終わった」という現在に生きる兄との違いを指摘することはできるだろう。だが，その時間的なずれをより強く伝えるのは，その直後，破り捨てた手紙の中に，芝生の上に立っている誰かの足が写った写真を主人公が見つける場面である。いうまでもなく，破り捨てた手紙の中にあったその写真は，手紙とともにばらばらになっていたはずである。それゆえ，彼が見た足とは，写真とともにばらば

らになった，身体から切り離された足にほかならない。それは，彼が戦争中幾度となく目の当たりにしたであろう，現実に切り離された足のイメージを容易に喚起する。じじつ，その切り離された足の写真をみた主人公は，強烈な心身の不調に襲われる。「彼は机に腕をおき，その上に頭をのせた。頭からつま先までいたるところに痛みを感じたが，痛みの場所がすべて，どこもかしこも互いに作用しあっているように感じられた。彼はまるで，ワイアーでひとつに繋がれた照明が一つのバルブの欠陥によってすべて消えてしまう，そんなクリスマス・ツリーのようであった」（106）。同封されていた写真は，兄がアメリカで撮った何気ない写真でしかなかっただろう。その何気ない「現在」の写真が，「過去」であるはずの戦争の風景へといやおうなしに変容してしまう時間，「過去」が「現在」において強迫的に反復してしまう時間を主人公は生きている。

過去が「過ぎ去る」ことなく，「向こう側」にいくこともない時間の感覚は，主人公が自ら逮捕したというナチスの下級役人の女性について語る場面に強調されている。自らが逮捕したことを伝える主人公の語りには，一見その事実を客観的に淡々と報告する記述に見えながら，その事実に対するやりきれなさや後悔のような感情，すなわち，その過去を現在において適切に処理できないという感情が，微妙なかたちで表れている。「彼女はナチスの下級役人だったのだが，軍の規則の基準では，自動的に逮捕される範疇となる地位であった（“She had been a low official in the Nazi Party, but high enough, by Army Regulations standards, to fall into an automatic-arrest category.”）」（105）。見逃せないのは，“but” という逆接の接続詞が使われている点である。もし事実を客観的に伝えるのであれば，「彼女は軍の規則で自動的に逮捕される地位にあった」とだけ言えばよいはずである。それを主人公は，彼女が下級役人であったことにあえて言及しつつ，

そこに逮捕された事実を “but” でつなげている。そもそもこの逆接の接続詞は，繋ぎ合わせた二つの文において，先に述べた文から当然予想される結果が，後の文によって裏切られるときに使われる表現である。その意味で，一見すると客観的に思える彼の語りは，彼女が下級役人であったことと彼女が逮捕されたという事実について，ふたつを当然予想される原因と結果だとみなしてはいない。そこには，すでに確定してしまったはずの過去の事実に対して，軍の規則だったからという単純な説明ではわりきることのできない感情をみることができるだろう。なぜ彼女は逮捕されなければならなかったのか，その過去の出来事への問いが繰り返され続ける現在に主人公はいる。

過去の現在への切迫がより強く描かれているのが，その女性が持っていたという本に書き込まれていた言葉と主人公との関係である。女性の本が描写される場面，主人公は，その日すでに二回開いているのにもかかわらず，もう一度その本を開き，そこに女性が書いたと思われる「神よ，人生とは地獄である」という書き込みを読む。その過去に書かれた短い言葉は，戦争が終わっているはずの主人公の現在に，ひとつの告発として迫ってくる。「そのページを見つめ, 部屋の病的な静けさの中にいると, その言葉は, 言い負かすことが不可能な，圧倒的な告発の彫像として見えてくるのだった」（105）。重要なのは，彼がそこで，その言葉の「中に」取り込こまれてしまうのではないか，という奇妙な感覚を感じることである。「X はそのページを数分間見つめた。その中に取り込まれないように，必死に耐えながら（“X stared at the page for several minutes, trying, against heavy odds, not to be taken in”）」（105）。この “in” という語は，兄の手紙で使われていた “over” という語と，著しい対照をなしているだろう。主人公にとっての過去という時間は, “over” とはまるで反対に, “in” という, 文字通り「真っ

只中」に感じられるものなのである。それは決して過ぎ去ったり，向こう側にいったりすることがない。ひとつの圧倒的な告発として，主人公をその「真っ只中」におくのである。

その書き込みの言葉に対して，主人公が新たに言葉を書き込もうとして失敗するというエピソードは，彼の苦しむ時間性が，言葉の問題としても描かれていることを示している。女性の過去の言葉の「中に」取り込まれまいとする主人公は，その女性の書き込みの下に，ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』の一節である，「父よ，師よ，『地獄とは何か』。私はこう考える。地獄とは，愛することができないという苦しみである」（105）という言葉を書きつけようとする。このドストエフスキーの「地獄」についての言葉は，「人生とは地獄である」という女性の言葉への，ひとつの答えとなりうるものである。しかし，その答えとなりうる言葉を書き終えたと思っていたとき，彼は自分の書いたものが全く判読できないものであったのに気がつく。「彼はその書き込みの下にドストエフスキーの名前を書こうとした。しかし，体中を走る寒気とともに，自分が書いたものがほとんど全くと判読できないものであることに気がついた」（105）。過去の言葉の告発に対して，主人公はそれを，現在の言葉で「言い負かすことが不可能（uncontestable）」な状態にある。それは，彼の言語能力の失調が，ただ言語能力だけに関わるのではなく，深く時間の問題に関わっていることを示している。極めて興味深いのは，それはフロイトが指摘しているトラウマの言語の問題とそのまま重なっていることである。内田樹がわかりやすくまとめているように，フロイトにとってトラウマとは，「その経験を記憶したり，記述したり，評価したりする言語がその人自身には構造的に欠落しているような経験」（内田　154）のことをいう。言い換えれば，言語化できない過去であるからこそ，それは現在に強迫的に回帰してしま

うのである。一見すると言語のみに関わるようにみえる主人公の失調は，この強迫的に回帰してしまう時間こそを表出させている。

言語化できない過去が強迫的に現在に回帰してしまうという時間の苦しみは，主人公とノルマンディ上陸作戦をともにしたクレーという同僚との会話にみることができる。主人公の部屋に入ってきたこの同僚は，会話の中で唐突に，彼らが行動をともにした過去の戦争体験を「覚えているか（Remember）」と問いただし始める。「覚えているか，俺とお前でヴァローニュへ車で行って，2 時間ぐらい砲撃を受けていたときのことを，それに，俺たちがあの穴の中に隠れているときに，ジープのボンネットに飛び乗ってきたもんで俺が撃ち殺したあの猫のことを。覚えているか？」（170）。とりあえず「ああ」と答える主人公は，表面的にはクレーと同じようなかたちで過去の出来事を共有しているようにみえる。しかし，「その猫のことについてはもうやめてくれ」（110）とすぐに頼みこむことから分かるように，クレーと主人公とは，その記憶を言語化できるかできないかという点において，全く異なる時間の感覚の中にいる。クレーとは異なり，主人公は戦争の記憶をすんなりと言語化することが決してできない。その違いがより際立つのは，クレーを追い返そうとして，「あの猫はドイツのスパイだった」というナンセンスな話を始めた主人公が，その冗談を最後までやり通すことができず，途中で嘔吐してしまう場面である。「あの猫がドイツのスパイだった」という冗談は，ある意味で，過去の出来事に対するひとつの言語化の試みであるといえるだろう。過去の言語化を阻まれ，代わりに嘔吐という身体的な症状が噴出してしまう主人公は，過去が強迫的に反復する強迫神経症の患者についてのフロイトの次の説明と，正確に重なっている。

> われわれはこういうことができよう——要するに被分析者は忘れられたもの，抑圧されたものからは何物も「想い出す」erinnen わけではなく，むしろそれを「行為にあらわす」agieren のである，と。彼はそれを（言語的な）記憶として再生するのではなく，行為として再現する。彼はもちろん，自分がそれを反復していることを知らずに（行動的に）反復し wiederholen ているのである。（フロイト　52）

フロイトの説にそって言えば，主人公の嘔吐とは，言語化できない過去の反復にほかならない。主人公の言語における問題の根底には，過去を過去として処理できないという時間の失調こそが潜んでいるのである。

主人公の嘔吐が寸前のところでくずかごに納められる場面を描写する文は，彼の抱える時間の苦しみを皮肉的なかたちで伝えている。「X は突然吐き気をおぼえ，椅子に座りながら身体をよじり，くずかごを摑みとった——寸前のところで間に合った（“just in time”）」（110）。この描写の最後の言葉 “just in time” という表現は，文脈を考えれば，「（嘔吐物が床に巻き散らかる）寸前のところに間に合った」という意味になる。しかし，それだけを取り出してみれば，その言葉は文字通り，「時間の真っ只中にいる」という意味にもなってしまう。それはまさに，過去が “over” の状態にならず，現在においてもなお “in” という状態で在り続ける，主人公の PTSD の時間性そのものを表している。

2. 祈りの時間性

こうして物語は，過去が現在において “over” という状態にならないことを，PTSD という症状を通して，一つの「悲惨」として描き出す。だがその一方で，その特異な時間の感覚は，ただ悲惨なだけのものとして描か

れているわけで決してない。最後の場面，PTSD に苦しむ主人公に一つの救いをもたらせたエズメの遅れた手紙と壊れた時計は，とりかえしのつかないほどに過ぎ去ってしまったはずの時間を乗り越えて，過去から主人公の現在に届けられる。それは，エズメの祈りが，PTSD に対抗するかたちで，現在において決して “over” という状態にならないことを示しているだろう。悲惨においてだけでなく，人を想って祈る「愛（love）」においてもまた，過去が決して “over” にならないこと，「愛と悲惨をこめて」という副題を掲げた物語がもう一方で描くのは，そのような祈りの時間性にほかならない。

過去が過ぎ去らないという時間の感覚が，ひとつの病ではなく，ひとつの救いとしてあることは，主人公の手紙に対する態度に予告されている。作品全体を構成する 3 つの時間のうちの 2 つ目の時間軸，はじめてエズメに会ったときのことが語られる，主人公がまだ PTSD となる前の時間軸において，主人公についての描写で強調されているのが，彼の手紙好きの性格である。デヴォン州で三週間続いた特殊訓練を終え，その日の夜にロンドンへ発つことになっていた主人公は，出発までの時間を町中で過ごすべく外出し，入った喫茶店の中で，すでに何度も読んでいた妻と義母からの手紙を取り出す。「それから私は，レインコートを含めたすべてのポケット中を探り，ようやくこと，読み飽きた手紙（“a couple of stale letters to reread”）をみつけた」（91）。注目すべきは，何度も読んで「読み飽きた」というその手紙の内容が，一度読みさえすれば再読の必要がないようなものにしか思えない点である。「ひとつめは妻からで，八十八番街のシュラフツ店のサービスの質が落ちたと書いてあり，もうひとつは義理の母からで，『キャンプ』が終わり次第，カシミアの糸を送ってほしいとのことだった」（91）。内容的にみれば，二人の手紙は，まったくもって「つまらない

(stale)」時事的な話題と頼み事でしかない。[5] だが，主人公はそれを服に入れて携帯し，何度も繰り返し読んでいる。この態度は，主人公にとって手紙とは，書かれた内容が古くなれば用済みとなるものでは決してないことを示している。過去に書かれたその言葉は，たとえその内容自体が古びて用済みになったとしても，彼の現在にとっては意味を持ち続けている。手紙に書かれた言葉を繰り返し読む彼の態度は，決して過ぎ去らない過去という時間の感覚が，戦争に真っ只中にいる彼にとって，一つの救いとなりうることを暗示している。

手紙を通して示されるこの時間の感覚は，彼がその手紙を読んでいたところで出会うエズメにも共有されている。教会のコーラスの練習の場で最初にみかけ，喫茶店で再会した彼女との会話に中で，主人公はエズメが亡くなった彼女の父親の手紙を大切に保管していることを知る。彼女は，彼女の父が美しい文章を書いたという理由から，「後世の人たちのために(“for posterity”)」(99) その手紙をとっておいてあるのだという。エズメにとってもまた，手紙は書かれた内容を伝えて終わるだけのものではない。「後世の人たちのために」という語が直接使われているように，過去に書かれた手紙の言葉は，その内容に関わる一時的な時間を越えて，「現在」に生きる人たちに意味をなし続けるということを，彼女もまた信じているのである。

二人に共有されているこの時間の感覚は，別れ際にエズミから発せられる祈りの言葉の時間性に，自然に結びついていく。二つ目の時間軸の最後の場面，主人公が戦場へと赴くことを知り，同じ場所で再会することがで

5　この手紙の描写の場面で使われている “stale” という形容詞が，「古くなった」という意味のほかに，「平凡な，つまらない，陳腐な」という意味も含んでいる点については，野間の指摘による。野間の 38 頁を参照。

きないことを悟ったエズメは，別れの言葉を言うさいに，次の祈りの言葉を添える。「あなたが無傷で戦争から戻るのを願っています（“I hope you return from the war with all your faculties intact”）」（103）。二人が共有している時間の感覚を思うとき，“I hope” と “you return” という現在形の表現は，単なる慣用的な文法事項以上の意味をもつだろう。そもそも現在形とは，日常的に行われる習慣的な行為や，いわゆる「普遍の真理」をいうときなどに使われる表現であり，日本語の「現在形」という名称からすると逆説的なことに,「現在」という時間だけに関わるものではない。たとえば，“Water boils at 100 degrees Celsius.” という例文における “boil” という現在形が示す時間は,「過去」と「未来」から区別された「現在」のみの状態をいうものではない。それはむしろ,「過去」「現在」「未来」という時間の区切りを越えるようにして適用される,「繰り返し起こる」「永続的な」出来事を表している。[6] その現在形が本質的に含んでいる時間の感覚は，主人公とエズメが手紙に対する態度の中で共有していた,「過去」「現在」「未来」という区別を乗り越えて意味をなす時間の感覚と強く響き合うものだろう。その意味でエズメの祈りは，祈られた内容に対する時間の経過とは別に，たとえその内容の結果が出た後でさえも，主人公の「現在」にとって意味を持ちつづけることになる。

主人公は，エズメの願いもむなしく，ノルマンディ上陸作戦に参加し，心身に深刻な損傷をうける。文字を満足に読めなくなった彼は，自分のもとにきた手紙の多くも未開封のままになっていた。そんな中，主人公が遅れて気がついたエズメの手紙には，過去が時間の区切りを越えるようにし

6　例として挙げた文の引用元である *English Grammar in Use* では，現在形を次のように説明している。“We use the simple for things in general or things that happens repeatedly”；“We use the simple for *permanent* situations.”

て働きかけるという時間の感覚が，散りばめられるようにして埋め込まれている。そのわかりやすいひとつの例が，次の現在完了の表現である。「私はよくあなたのことを，そして，忘れてしまったかもしれないので正確な時間を書いておくと，1944 年の 4 月 30 日の午後 3 時 45 分から 4 時 15 分のあいだ，私たちがともに過ごしたとても楽しかったあの午後のことを想っています（“I have thought of you frequently and of the extremely pleasant afternoon we spent in each other’s company on April 30, 1944 between 3 : 45 and 4 : 15 P.M. in case it slipped your mind.”）」（113）。ここでエズメが使っている “I have thought of” という現在完了形は，過去に起こった出来事が，現在もなお何かしらの影響を持っているときに使われる表現である。それは，エズメがわざわざ明記している過去の時点から，エズミの主人公を想う気持ちが，現在もなお引き続いていることを意味する。いいかえれば，はっきりと明記されたその過去の一時点は，エズメの現在にとって，すでに過ぎ去った過去ではまったくない。過去と現在という隔たりを越えて，その過去はエズメの現在の中にある。

「過去」「現在」「未来」という自明に思える区分を飛び越える時間の感覚は，エズメの過去に向けての祈りにもみることができる。

> 私たちはみな，ノルマンディ上陸作戦のことでおそろしく興奮し，圧倒されました。それが，戦争や愚かとしか言えないやり方に，早急な終結をもたらしてくれることをただ願っています。チャールズと私は本当にあなたのことを心配しています。私たちは，コタンタン島を最初に襲撃した人々の中に，あなたが入っていなかったことを願っています。あなたはそこにいたのですか（“we hope you were not among those who made the first initial assault upon the Cotentin Peninsula. Were

you ?”)。(113)

この祈りが痛切なのは，エズメがノルマンディ上陸作戦の知らせを聞き，主人公がそこにいないようにと祈ったその時点では，主人公がそこに参加していたかどうかはすでに決定済みであったことにある。エズメの祈りに関係なく，結果はすでに決まってしまっているのである。いいかえれば，エズメの祈りは，すでに結果が決定している過去に対してなされている。大澤真幸は，たとえばすでに遭難してしまったことが報じられている息子の生存を祈るといった例を挙げながら，結果が決定してしまっているはずの過去にむけられる祈りが確かにあることを指摘している。それは，結果がすでに決まっていることを考えれば，一見すると何の意味もなく無駄な行為のように思えてしまう。だが大澤によれば，祈りとはむしろ，「過去にむけられたときにこそ，真に切実なものにふかめられていく」(大澤 38)。その理由を大澤は，「悔恨」という感情とひきあわせながら，次のよう説明する。

> それは，一方では，過ぎ去ったその出来事が，変えようがなく，打ち消しようがなく，そして選びようがない，ということを前提にしている。が，他方で，それは，出来事についてのこの打ち消し不能性を前提にした上で，それを否認し，まるでそれを改変したり，選択したりすることができたかのように，その問題の過ぎ去った出来事にかかわることから生じているのである。(大澤　38)

主人公がそこにいたかどうかが確定した時点から，あたかもその事実が自らの祈りによって変わることを望むかのように，エズメの祈りは過去に向

けてられている。大澤の言うように，それは出来事についての打ち消し不能性を前提にしたうえで，むしろその不能性が強くなれば強くなるほど，より切実なものになって過ぎ去った過去の出来事にかかわっている。祈りの後に付け加える「そこにいたのですか（“Were you”）」と言葉は，その短さとはうらはらに，打ち消し不能な過去の出来事へ切実に関わろうとする，その祈りの強度の強さを伝えているだろう。

エズメの手紙に同封されていた壊れた時計は，その切実な祈りの時間性を逆説的なかたちで象徴している。エズメの父の形見であるその時計は，とても丈夫であるという理由から，エズメが主人公に幸運のお守りとして持っていてほしいと入れたものである。これもまた，エズメ本来の願いは裏切られ，主人公の手もとに届いたときにはすでに壊れてしまっていた。だが，エズメの手紙に込められた祈りとは，そもそも正常の時計が刻むものとはまったく違う時間性をもつものである。過去を現在に結びつけようとする想いも，打ち消し不能な過去へ向けられる祈りも，時計が示し続ける正常の時間，過去が過去として過ぎ去いく時間からみれば，「壊れた」ようにしかみえない時間を前提にしている。そうだとすれば，「戦いが続く中（“the duration of the conflict”）」で持っていてほしいというエズメのもともとの願いは，はからずも，ある意味では実現しているようにも思われる。正常の時間において，戦争はすでに終わっている。だが主人公は，いまだ PTSD という時間の病の中にいる。過去が過去として過ぎ去っていくという通常の時間，通常の時計が伝える時間に，彼は生きることができない。その意味で，その PTSD の時間における「戦いが続く中」には，通常の時計ではなく，「壊れた」時計こそが，幸運のお守りとなりうるのではないか。なぜならそれは，通常の時間からは壊れているようにしかみえない，祈りの時間性を直接に伝えるものであるからだ。

壊れた時計を手に取った主人公が心地よい眠気を覚える最後の場面は，エズメの祈りがひとつの救いとして確かに届いたことを，やはり時間の表現によって描き出している。心地よい眠りの中で主人公は，エズメに呼びかけるかたちで，眠気を覚える人間が，再び無傷の状態になるチャンスがあると述べる。「本当の眠気を覚える人間ついて考えてみれば，エズメ，彼はつねに，すべての能力，すべてのノ―ウ―リ―ヨ―クを再び無傷にするチャンスを持っているのだ（“You take a really sleepy man, Esmé, and he always stands a chance of again becoming a man with all his fac — with all his f-a-c-u-l-t-i-e-s intact”）」（114）。この回復の可能性を宣言する文は，その内容以上に，現在形によって語られている点を見逃してはならないだろう。それはエズメの祈りの時間制と同じように，現在形のもつ「普遍の真理」の時間性を思い起こさせながら，「過去」「現在」「未来」という区別を乗り越えた時間に関わっている。遅れた手紙と壊れた手紙のもつ祈りの時間性を，主人公もまた生き始めている。

主人公が最終的に祈りの時間の中にあることは，その最後の言葉に強調されている。「無傷で帰ってきてください」というエズメの最初の祈りへの返答に思えるその言葉の中で，主人公は “faculties” という語を，一文字ずつ区切って発話する。それは，以前にエズメと過ごしたとき，エズメが主人公にした行為の模倣になっている。エズメが父の死を伝える場面で，彼女は近くに弟がショックを受けないようにと，“slain” という語を同じように言っていたのだった。[7] この模倣は，エズメと過ごした過去が，主人公の現在に回帰し，反復していることの証左以外の何ものでもないだろ

7　エズミの発話が弟を気遣ったためであるという解釈は，Bruce F. Muller and Will Hochman の *Critical Companion to J.D. Salinger : A Literary Reference to His Life and Work* の 146 頁を参照。

う。PTSD との戦いの中で，遅れた手紙と壊れた時計を受け取った主人公は，そのような祈りの時間の中へと入っていく。

お わ り に

このように作品は，PTSD の時間性と対照させながら，祈りの時間性を描き出していく。戦争が終わった直後の主人公は，過去が過ぎ去ることなく強迫的に現在に回帰してくる時間を，ただ PTSD というかたちでのみ体験していた。それは，戦争は終わったという感覚を決して持つことのできない時間を生きることである。だが物語は，過去が過去として過ぎ去ることがない時間が，実は祈りにおいてもまたあてはまることを描出していく。その祈りの時間は，PTSD の時間に生きていた人間に，遅れた手紙と壊れた時計というかたちで，彼の現在に確かに届けられるのである。

参 考 文 献

Antico, John. “The Parody of J. D. Salinger : Esmé and the Fat Lady Exposed.” *Modern Fiction Studies* 12.3（1966）: 325-40. Print.

Muller, Bruce F. and Will Hochman. *Critical Companion to J. D. Salinger : A Literary Reference to His Life and Work*. New York : Facts on File, 2011. Print.

Murphy, Raymond. *English Grammar in Use 3rd edition*. Cambridge : Cambridge UP, 2004. Print.

Salinger., J. D. “For Esmé—with Love and Squalor.” 1950. Nine Stories. 1953. New York : Little, Brown and Company. 1981. 87-114. Print.

内田樹『映画の構造分析――ハリウッド映画で学べる現代思想』文春文庫，2011 年。Print.

大澤真幸『＜自由＞の条件』講談社，2008 年。Print.

野間正二『戦争 PTSD とサリンジャー――反戦三部作の謎をとく』創元社，2005 年。Print.

ジークムント・フロイト「想起，反復，徹底操作」『フロイト著作集 6 ――自我論・不安本能論』井村恒郎，小此木啓吾他訳，人文書院，1970 年。49-58 頁。Print.